

増田孝・その画業と美術教育

— 追悼 —

五十嵐 嘉 晴

1 抽象からネオリアリズムへ

増田孝先生は、中学生のころ水彩画で地元の教育委員会等の賞を取っていた。油絵を始めたのは高校に入ってからであり、昭和29年に福井県総合美術展の洋画の部で福井新聞社賞を受け新聞の見出しに名が出ただけでなく、18歳の高校生でいきなり二科展に入選する才覚を見せた。その後毎年連続して二科展に入選し、やがて会友、会員になり生涯に亘って出品し続け諸賞を受けた。

十代の終わりから二十台半ばまでは、抽象作品を制作していた。しかし美大に入るため熱心にデッサンをしたと考えられる。そして美大では、本格的に具象を勉強した。その傍らやはり抽象作品を、二科展や福井の県展に出品していた。それらは、「若者らしい大きな構成」¹、「色彩のコントラストを考えた」「荒けずりだが精力的」²と、福井の新聞には写真入りで紹介されていた。高校生の時、福井大学で岡本太郎、福沢一郎らの夏期美術講座に参加して二科の息吹に触れたことが、抽象と二科へ進むことになったきっかけである。二科には福井県出身の藤沢典明、久里洋二などがおり、福井では北美の活動や小野忠広などにより、アヴァンギャルドの機運が強かったことも影響していよう。そして当時、二科で華々しかった岡本太郎、大沢昌助、山口長男、吉原治良などの動向に若者らしく同調していったのであろう。増田先生の抽象画は、ダイナミックな動き中心で立体的感覚もあるが、色に拘っているようである。立体的造形感と言え、学生時代に彫刻に惹かれたらしいし、後に就職した中学校の生徒にも彫刻作成を指導していた。³ 増田先生の学生時代の美大では、1～2年生は各科各専攻に共通の実技科目

を受講する制度であって、美術の諸ジャンルに認識を深めることが出来たことも将来役立って行った。後年、金沢でシンボルモニュメントを二つ制作している。

ところで増田先生は少年期について、武生郊外の家の田畑が軍用飛行場となり、そこで働く勤労奉仕の人々や兵士達の厳しい姿、戦災の福井が燃える真っ赤な空を見たこと、福井大地震も経験したことを忘れ難いと追想している。戦後に飛行場はまた水田に返り、青年時代の語らいとスケッチの場であったが、今また田畑の中を自動車道が通る。この時代の変遷、激動を精神の奥層に宿し、これが性格と芸術思想の形成に作用して行った面もあるだろう。この少年期から美大生の時期にかけてのことを、自分で次の様に著したことがある。

「北国の風土は暗く厳しい。しかし、私の生まれた余田町は、福井県武生市の郊外にあって深緑の低い山すそを背に広い広い田畑を一望できる、実り豊かな田園地帯である。今は国道が田畑を横切り、少しずつ時代の波が押し寄せてはいるものの、越前富士といわれる日野山を前に、朝夕に手を合わせる姿が残る信仰心の深い土地柄である。

その土地に生まれたものはその土地に根づく、という風習の強くのこの土地でもあった。戦後、戦災から立ち上がろうとする活気が県全体にみなぎり、特に前衛的な文化を積極的に受け入れようとする熱気の中で高校時代をむかえた私は、県美術展に入賞という一つのきっかけで夢がふくらみ、画家志望が芽生えたのであった。

＜絵かきなどは道楽者のすることだ＞と、農夫で文学にも関心の深かった父は、汗を流して働く尊さを説き、絵を描くことを許そうとしなかった。反対

が強ければ強いほど持ち前の負けん気の強い私は、絵を描く以外に自分の生きる道がないと金沢美大へ進学してしまった。

金沢は福井と隣県ではあるが、活動的な福井とは異なって、伝統や経験を重じる古都である。当時は、より新しい物のみを求めようとしていた私であったが、その早まる気持ちにブレーキをかけ、自分の未熟さを見つめる日々を与えてくれた。

1に絵を描くこと、2にさらに絵を描くこと、3に食わずに絵を描くこと、4に描かねば死ね、とおのれ自身に厳しく、がむしゃらに描いた昔が、今は懐かしい。」⁴

この1~4のモットーは、美大旧校舎の教室の壁面に木炭で落書きとしてあったもので、若い熱意に燃えた美大生の気性を示しているが、それを進んで実行する意欲は生涯続いた。これが増田先生の基本となり、そしてまた若い力を尊重する気質を作っていたのであろう。制作だけでなく、モデルさんの休みのときは校庭の櫓に登ったり、その下で昼から仲間たちと酒を酌み交わし芸術論や人生論で熱くなった心身を、側の池に飛び込んで冷やす者もいた青春の情熱を後年になってもいつも背後に垣間見せていた。「道楽者の絵かきなどになるな」という親の反対を押し切って美大に入学したので、「大成してやろう」という意欲に燃え、北国の環境に負けん気の根性を持ち続けた。

卒業制作は具象で『運ぶ』と題され、学校の買い上げに選ばれた。それは人物把握と群像構成がしっかりして力を持ち、穏やかに美しい色彩の絵画は高光一也教授の影響か、厚塗りのタッチで描かれた。後年も、「自分でも好きな作品です」と言っている。美大卒業後1年間は高光先生の助手であったが、当時の無給助手にあたる。昭和36年に、福井市の明道中学校の教諭となった。福井では、具象と共に少なくとも昭和37年頃は抽象も描いていた。第一回個展は、37年5月に福井市の勝木書店で38点の具象作品を展示して第一個展と名付け、その最終日以前に抽象作品20点をもって品川書店の画廊で第二個展を催し、その精力的な活動を見せけている。34年に二科展

に出していた抽象作品『動く』は、動きに満ちているがあっさりとした線構成で、ポロック的動きのミショー風作品とも形容できる。抽象においてもスタイルが年毎に変化していて、様々な挑戦をしている気概が窺える。

昭和30年代の具象は、着実な人物像で色々な詩情も感じられる。これは、ネオリアリズムと言う形容で表されたものにつながって行く。その内容を、本人の言葉と新聞記者の評によって見ると、次の様である。

「生活の中の変化を追い求めていく方が、詩やリズムが感じられて楽しいですよ。いま、能登半島をテーマに制作を続けているが“朝市”などを見ると生命力をひしひしと感じます。」「強烈な色より、どちらかという沈んだ色にひかれます」「抽象をめざす人たちは、デッサンなど抽象にはいらんといっていたが、いま考えると、私の場合デッサンが役立っている。やはりデッサンは大事だと思う（中略）」とデッサン礼賛論をぶつ。「この人の画風は、部分的具象だが、タッチとしては抽象、岩一つ描くにも、いろんな色で埋めていって、岩の生命を描き出して行く。ねばりのある筆のタッチで、この人の体質を感じさせる。沈静な色調、その色のたんねんな詰め合わせは、画面全体を鈍重な空気に押え、静かで一種ふしぎなムードにひき込む。」「いまのところ熱病にかかったように、石川県の能登の風物にひかれている。能登は老人と女と子供しかない。若い男手なしに生活している。そこには、時に流されぬ、その土地特有のものがある。そして特有の顔がある。それをモチーフにして、彼らの生活を描いてゆきたい。」⁵

ここに新たに、生活形象の具象そのものに魅力と生命力を見出し、抽象から描写に向かう方向が信念として形成されていっているのを知る。この現実感の把握も、金沢美大に学んだ若者らしい。

2 フランス

昭和42年4月から、第1回目のフランス留学を1年

間行った。当時に中学の美術教師が1年間も留学することは極めて異例であり、教育委員会との折衝はとても大変であったと考えられる。無論、留学中の給料支給は停止されていた。でも増田先生の熱意、持ち前の好感ある人柄の説得力が洋行を実現させたと共に、これまで培った郷土での評価と期待などに基づいて、文化発展のため個人の才能をさらに開花させる決定をした福井の上層部にも敬意を払える。この留学には、国際交流に積極的な二科会が、この年に提携先をそれまでのサロン・ド・コンパレゾンからサロン・ドートンヌに変えたこともあって、サロン・ドートンヌ派遣作家と言う形容も付いていた。

渡仏してサロン・ドートンヌに出品した『花』は、既に後年までの基本的視点を提示している。即ち前景に花、後景に建物（ノートルダムとサクレ・クール寺院など）を配した、心象的合成と装飾化である。

パリでの初めての生活以来、その後にこの地を訪れるとカフェの椅子に座して街を眺め「パリはいい…」と呟いていたように、この街は増田先生にとって魂の中核を占めるようになった。それは、芸術とそれを保証する自由と発意の環境として、この都を観ているのであった。パリ滞在により、二科の重鎮である東郷青児に親しく接することが出来るようになり、増田先生の二科気質は発展した。この師について、後年次のような文章を書いた。

「＜1967年7月4日。午後5時より東郷先生にお会いする。ホテルで二時間話す。夕食はタカラヤ（日本料理店）へ。鹿児島生まれの先生は、本当に魚がお好きだ。（中略）何気ないお話の中に、ハッとするようなお言葉がある＞

私が初めてフランスに学んだときの留学日記にこのように記されている。

先生とお会いし、初めて話したのはこの留学より11年前の1956年のことだった。二科会北陸支部結成のため来沢された折、二科会の方向と発展策について語り合った。私はまだ金沢美大2年生だった。当時の東郷先生は、戦後いち早く二科会を再建し、フ

ランスをはじめ、諸外国との文化交流をも進められ、戦後の日本美術史においても既に大きな役割を果たしておられた。もともと先生は大柄に見えるお方だったが、貫録というのか、威厳といえいいのか、とにかく先輩の会員の方々には絶対君主に接するような緊張感があった。しかし、私は若かったせいか、怖いもの知らずでズケズケと何でも話させていただいた。

それ以後東京では毎年お会いできたものの、日記にある初めてのフランス留学のときに先生と行動を共にすることができた数日間の印象が最も強く心に残っている。先生は70歳、私は30歳だったが、パリの中華料理店で一つの皿の料理を一緒につつき、ビールを飲みながらお聞きした話が一つ一つ今の私にとって大切なものとなっている。

留学中、パリで先生と夕食に出かけた帰り、タクシーのストで若い私でさえも疲れる距離をテクテクと歩かされた。先生をホテルまでお送りした別れ際に、先生は“君も疲れただろう”と真っ先に私を気遣われた。このような先生に私は人生の苦労を味わってきた人の思いやりと優しさを感じていた。二科会では暴君のように怖い先生とされていたが、どうしたことか、私はいつも優しい人柄と受け止めていた。当時パリは三十年都市計画（1990年完了）の事業がどんどん進められていた。古い建物を壊し、新しいビルを盛んに建設中であつたが、当時のマルロー文化相は、古いアトリエ付きアパートこそピカソを生み、モジリアニやユトリロを育てたのであるから、新計画の中に外国の芸術家たちを受け入れるスペースや配慮が必要であることを議会で主張したという。先生はそのマルロー文化相を称賛し、フランス国民の芸術文化に対する考え方を語られ、当時の日本の状況を大いに嘆かれたことを覚えている。

人間的な優しい心と、時代の先端を見つめ大きな視野で考えられる幅広さを備えた偉大な先生であつたと思う。先生がパリから帰国される日、私のフランス語を気遣い、下さった仏和・和仏辞典を今も大切に使わせていただいている。」⁶

東郷青児に倣ってか増田先生は地位が高くなって

も気さくで、何気ない会話に重要なことを挟み、パリの精神を高く評価し、国際交流に熱意を持たれていた。この文化精神は画業と切り離せないで、その例として金沢に対するエッセイ風の提言を紹介しておきたい。

「先日、一枚のはがきがパリ在住の友人から届いた。文面は月並みのあいさつであったが、私にとっては春を運ぶ便りのようにうれしかった。

パリという街には不思議な魅力がある。ホテルの一室で魂を込めて仕事をつづけた後、一步外に出ると、いいしれぬやすらぎを与えてくれる。それは、公園、建物、数々の文化遺産、または人々そのものであろうか。

フランスの歴史的な背景を別としても、かつてのエコール・ド・パリの連中を抱えこんだ時のように、今もなおパリの人々には創造するものや若者たちをこぞって大切に、その時代、時代における最も新しいものを受け入れる懐がある。きょうも、パリ市の改造計画が進められているが、古いものを媒体としながら現代のうちに未来そのものを見つめる革命的構想の実現化をめざす一端といえよう。

聞くとところによると、神奈川、兵庫、滋賀の各県においては「文化のための1%システム」として公共施設の建設費の1%を文化性を取り入れる個性表現費として上乘せし、54年度から実施に移すという。茨城、秋田などその他数県も検討中とのことだが、建築も機能重視からやっとうりゆりの建築になってきたことは他県ながらうれしい。個性表現とは、造園、壁画、彫刻、または噴水などの水の芸術であってもよいが、住民一特に若者たちの意向を取り入れた計画であることを願う。一つの建築は一つの都市、一つの社会と発展し、住む者の心を受け入れる人間尊重の計画のさきがけとなることと思う。

東洋人は古きを尊び、年齢に伴う人間の成熟や完成に敬意をいさぐというが、古きを尊ぶことを良しとしても、建築のみならず芸術その他の全分野においても、今後は守ることから創（つく）る積極性を取り入れることを考えていきたいものだ。

観光と伝統の都市石川も、あすを担う若者たちを

抱えこむ魅力ある環境づくりや、文化的活躍の基礎づくりを全住民の課題として考えていかねばならない。

一枚のはがきを前に思いをめぐらせ、今またパリに懐かしい思いをはせる。」⁷

転記が長くなったが、直接の言葉に接すれば、パリ抜きでは増田先生の魂が語れぬことが理解できよう。



昭和四十二年
パリにて

パリでは画塾アカデミー・モンパルナスで研修し、その後渡仏してそこに都合4次に亘って通うことになる。昭和43年冬から春にかけて、サロン・ドートンヌ以外のパリの三つの展覧会にも出品し、イタリアとエジプトを廻って3月に帰国した。その年の秋に開いた第4回目になる個展は、80余点を並べ滞仏作品が大半であった。「[観客は]、細かいタッチのキャンバスに見入っている。丹念な描写だけでなく写実的なものに幻想的な造形意識を加味した作風に“増田調”がよく出でいるとなかなか好評。」と報道された。⁸

同年の二科展に出品した『花売車』は、前景に花、後景に大きくパリのノートルダムの正面を暗い色調で描いている。昭和40年代は、暗い色の教会を背景に、前景の花の明るい色が浮かぶ作風が目立つ。また、シャルトル風景を熱心に写すのが始まっているし、紫陽花も登場している。紫陽花は福井市の花であるが、フランスの光景にも配され、装飾効果を盛り上げている。

3 金沢での展開

昭和44年秋に、母校の金沢美大に高光一也教授の

後任として選ばれた。34歳の講師で、最も若い講師として話題であった。美大に赴任が決まった時、中学では週26時間授業を受け持っていたが、大学では担当時間が少なく画業に打ち込めると喜び、次のように決意していた。「自分自身でも、洋画の基礎からやり直すつもりで、新境地開拓に努力する。」「今後は、老人をテーマにした、人生感に訴えるような具象画の制作に取り組んでみたい。」⁹

しかし、いわゆるネオリアリズムには進んで行かなかったと言えよう。むしろ日本を離れ、46年から47年にかけてまたヨーロッパに数ヶ月間美術研修し、エジプトを廻って帰ってきた。でも中東については右記の本人の言葉にも拘わらず、作品化はしていないようである。48年にもヨーロッパに旅行し、感性を磨いていった。

昭和40年代末から50年初めかけての二科出品作等は、裸婦と花、静物、花とヨーロッパから持ち帰った人形をモチーフとし、モダニズムのかなりオーソドックスな構成と色の探求に基づいている。昭和50年代からは色調も明るくなり、描写表現と構成に独特のものが出ている。構成モチーフが多くなり、あれこれのイメージ構成への配慮が整って来ている。その頃は、ギリシャのレリーフを背景にした作品がよく見られる。また大画面にも取り組み、未完成のままとされる「トレドへの道」と言われた大絵画(50年頃)、加賀市に設置したモザイク画(56年)などにその例であり、中でも54年に二科展に出品した『初夏の詩』は300号で、会員努力賞を得た。

こうした時期の増田先生の絵画思想は、次の様な新聞記事から知られる。昭和53年に、「装飾性を大切にする独自の画風が二科会で定着した」とする記事の中で、どんな世界でも、生活を美しく飾っていくのが美術の原点であると強調し、現代のダイナミズムを忘れない、自ら“永遠青年”を目指していると語っている。この記事からインタビューの部分を転記すると、以下の如くである。

「— ことしの二科展作品『愛しきものたち』など、具象的で構成の面白さをねらった作品が多いですね。

昔は抽象的なものも多かったが、絵の具を大事にしながら仕事を進めるうちに具象絵画になった。色調は、北陸の風土に対する反発からでしょうか、明るいものが好き。最近は深みがあって品のある青にこっています。要するに、絵は色、構成でいかに装飾性を高めるかということだ。

— 好きな画家は。

現代は、カラフルな時代ですね。町中どこでもカラーという意味で装飾を大事にしている。この点ではゴーギャン、モネなんかが現代美術の出発点という気がするし、もっと研究しなければいけない。

— これからのテーマは。

美しくて人間味があり、深みのある絵は永遠のテーマです。ヨーロッパの町並みや生活を題材にした絵が多かったが、最近、アラブにひかれている。巨大なピラミッド文明を築いたアラブの底力というか、土くさい中での本当の強さみたいなものをシリーズで手がけていきたい。」¹⁰

次の記事も、その頃の増田先生の考えを伝えている。

「＜自身が生きている時間、所在の空間がベストであるよう願うところに前進がある＞という主張どおり、学生に対してよりよい教師であると同時に、画家としても精力的に、まじめな精進ぶりを示している。一枚の花びらもおろそかにしない厳しいデッサン力と色彩のコントラストでまとめる作風は、ち密な具象美の世界。

計算され尽くしたデッサンが基本、そこに心象の色彩を盛り込むという制作システムに徹底しているため、完成までの時間が長く、寡作のタイプ。それだけにタブローを納得させ、確信を持って完成にこぎつけたときの喜びはひとしおらしい。

「負けん気の」根性が、目ざした絵画への道をひたむきに歩ませている。抽象から人物を描く基礎勉強に移り、ふたたび抽象を手がけたが、アンフォルメルからボディーペインティングなどに至って、行きつくところまできた抽象を＜平面上での仕事＞と割り切るようになり、心象世界に目ざめるようになった。この転換のふんざりをつけるためにアカデミ

ー・モンパルナスに学んだ。

パリ画壇は色彩の洪水だった。色彩と心象の調和を求めて、ゴーギャンやマチス、ボナールの作品に接し、そのつど魅了されながら描いた。ワビやサビの世界を経た日本人には、ある面での精神性があるが、色彩をこなすまでに、かなりの時間がかかると思った。そして、その精神性を失うことのない色彩を、キャンバスに昇華させた心象画に人生をかけたい—ときっぱり言い切る。アトリエに並ぶコレクションのスペイン、エジプト、イタリアのつぼは色彩的で美しい。」¹¹

こうしてヨーロッパの芸術と素材を、自分の志向に合わせて取り入れる洋画家らしい態度は、やがて素直にさらに独特なものへ向かって行く。それは、かつて生活としての能登の光景に惹かれていたが、今度は自分の絵のための日本の風景とモチーフの導入である。スケッチ旅行から妙高高原の絵を自信を持って提示し、依頼によるとはいえ、加賀市に設置したモザイクには白山、新聞企画で石川門や吉崎御坊を描き、出来映えが良かった。和と洋の城や小道具を対象とすることに、共に長けていった。60年代には、モチーフに日本の人形も導入し、サロン・ドートンヌへに出品した『朝陽花』は、和風のモチーフによる澄んだ色彩と堅牢な構成の、新鮮な日本感ただよう油絵であった。それには、二科の大先輩である坂本繁二郎について、以前に増田先生が短文に著した思考に伏線があると考えられる。

「ひっそりとおかれた植木ばちやカキなど、およそ絵になりがたいものをも含めて、それらが宇宙につながる存在として、われわれに迫るこの力、いいあらわすことのできぬこの手ごたえは、芸術の深さと言うべきだろう。

坂本芸術は、西洋の表現と東洋の心を溶けあわせて作りだしたともいわれているが、単なる表現技術のみでなく、哲学的探求で独自の世界を開いたその芸術性は、私を終生魅了し続けることであろう。」¹²

また正方形のキャンバスによる画面構成が、昭和50年代から見られる。気に入ったモチーフにより、自分なりの画境を現出させるこの美について、当時の



「朝陽花」、昭和六十一年

新聞は作品をカラーで印刷し、次のような解説が載せた。

「増田さんの作品にはよく人形が描かれる。人形たちは時に主役であったり、わき役であったりするが、どのような場合も必ずそこに魂が込められる。三体のアンティークドールは増田さんの世界ではもはや静物ではなくなっている。＜人形に注がれしみついた愛情を表現したかった＞と言う。心象を強く打ち出したファンタジックな画面は、洋画でありながら実に東洋的な心で支えられている。

人形達の手先、髪の手先まで入念に描写される一方で、大胆な省略も行われている。線を利かした部分、面でとらえた所がお互いに効果を出し合っている。こうしたコントラストの効果は色彩にも巧みに取り入れられている。人形の洋服の緑、白と布の赤、足元の黒の対比は、あたかもマジックのように鑑賞者の目をとらえる。

五、六年前から増田さんは好んで正方形のキャンバスに向かうようになった。正方形は空間や背景のとりえ方が難しい。＜だからこそ面白い＞と返す言葉には、古典の上に立った新しい絵画を追究している増田さんの執念と自負が感じられた。」¹³

画境の深化と共に、昭和57年の個展に際して、「この展覧会を機に色の見直しをしたい」と語り、色彩は一層輝きに向かった。¹⁴ 心は、歴史、生を巡って思索を続けた。それは、いつもながら気持ちを良く伝えるエッセイに著されている。

「石川門に心動かされ、ひかれてもう何年になるだろうか。訪れ、仰ぎ見るたびごとにそれは何かを感じ得させ、さらに深く傾斜させるものを持つ。

そのいい知れぬ魅力は、心動かすものは、いったい何なのだろうか。

その魅力を絵としてとらえ 近代的な明快さの中につかまえ描こうとすると、これまた難題であり、何枚のエスキースを捨てたことか。

石川門を描かんと再び兼六園を訪れたのは 三月下旬のまだ肌寒い早朝であった。朝日の中で眺める石川門は格別で、なまこ壁の白と鉛かわらの青が、静かに白く微妙に変化して、園内の緑との調和もみごとで、文句なく美しかった。この感動のエスキースをもとに、私の祈りの絵にするために姫てまりなどとの構成を思いついた。二つの異なったものをコントラストさせることで比較させながら見る人の目を誘い、私のテーマの持つ内容を印象づけることをねらってみた。

石川門は封建時代の余韻の跡ではあるが、その歴史性はともかく、今日では市民の生活の安定を願う祈りのシンボルと化している。また、こまやてまりの今に伝わる民芸的な物で、特にわらべたちの手にした物には、昔から伝わる人々の心と懐かしさが感じられる。

石川門のそのいい知れぬ魅力は、今も私の内なる血潮をたぎらせ続ける。

それは古いという歴史の重みだけではなく、それに対すれば祖先のいのちに触れる思いを抱かせ、生きることの尊さを教え、考えさせるのである。」¹⁵

生き方と芸術は、増田先生の場合切り離されない。年齢による変化に従いながらも、永遠青年の底を貫通し絶えざる向上に精進していた。昭和60年に開催した個展の折りの発言は、次のようである。

「若いときは、ヨーロッパで通用する絵をと力んでいた。」今もその思いは捨てていない。小さくまとまることを潔しとしない。ヨーロッパにいくたびに、「色彩の動かし方、形の生かし方など得るものが多い」、追求しているのは、色の構成による「(画面の)強さと個性のにおい。」¹⁶

昭和62年には、八角カンバスを作成させて、表現したいことを巧みに配置することも始めた。主題には四季を取り上げ、この作風は平成8年までも続いていった。

4 二科

増田先生の画業は、二科会への所属とその北陸支部の発展への貢献が最も大きな部分を占めている。平成2年に発行された二科会の記念誌で、編集した評論家が地方の活性化を指摘しているが、それには増田先生の業績が大きかったと思う。会報「二科」に寄せられた追悼文の中で、パリ時代からの旧来の仲間とは、「増田君の仕事への努力と北陸二科への情熱にはいつも心打たれるものがあった」、「経営能力にも才を見せ、多くのアイデアに満ちた二科支部の経営をしていた」、「北の砦の様な存在だった」と記した。¹⁷ 昭和56年に自分で書いた次の文は、二科と自分への気持ちを良く示している。

「伝統の街・金沢に、新しい価値の創造をめざす二科会の信条に共鳴する同志が強烈な探求心と意気軒昂(こう)の若い志で、この地に新風をふき込もうと二科会北陸支部を発足させてこととして二十五周年になる。

近年、なじみの鑑賞者に会場でお会いできるようになり<北陸二科も、やっとこの他に根を下ろしたな>と感無量である。ここ数年来、二科本展で連続して各部門〔絵画・彫刻・商業美術〕に受賞者を出すことができるということは、力量的に飛躍が続いているとみてもよいと思う。またそのことを、素直に支部同人全員の喜びとしている。(中略)

これらの受賞は、同人仲間の知的な刺激ともなり、ここ数年間の同人のレベルアップは目覚ましいと自負する。またこの支部展で、多くの人たちにわれわれの一年間の模索の跡とその成果を問いたいと思っている。

私は芸術を志すとは、人間として豊かに生きる道を求めて、人を愛し、つねに若者のごとく勇敢に全力で生きる。そして長い長い終わりのない修行と己

が魂の苦闘の記録をつづることだと考えている。

われわれ同人は、それぞれの求道の姿勢は異なっているけれども、ある者は脈うつ心の投影、内面を造形の次元まで高めんと、ある者は日々の生活とのかかわりのなかで、実在感のある作品作りを、また造形的な面白みを、それぞれただ単に意欲だけで、技巧だけで終わることのないように、まして論理だけで終わることのないように互いに戒め励ましあって、精神的なライバルとして対話し活動の幅をひろげんとしている。

ことしも支部展修了後、初秋の二科本展をめざし、残された期間を自らの手でさぐり、創（つく）り出そうと、己自身に挑戦したいと思っている。」¹⁸

増田先生の文は過不足無い見事な文章で、文を書くのが仕事でない画家にとっては、気配りと率直さある作文にさぞ神経を使い推敲に大変だったろうと思う。それは芸術家らしく時々詩的な表現ともなり、また生と芸術を真摯に見つめるアドバイスと意欲がよく表れており、画業と二科への熱い気持ちから生じているものである。二科会は、新しい価値の創造に向かって不断の発展を期することを信条とし、制作上の自由をあくまで擁護し、新しい価値の創造者を抜擢し待遇し、常に世界的視野に於ける創造者として、新しい美の温床たらしめることを趣旨としている。この精神を、増田先生は体現し実行していた。次の表明も、そのことを良く示している。「それぞれに自分の信じる視野に立って、形式にこだわることなく自由に制作活動を行うことを信条として歩み続けてきたわが二科会北陸支部ですが、時代性を敏感に受けとめ現代に生きる者が抱く内部的考察と模索の結果を一人一人が表現するのであるから、それなりに傾向が似かよってきても仕方のないことかもしれません。しかし創造するということは、その徹底性においてより厳しく前進的であり、新しい価値の発見に務めることであるから、今年こそ心機一転、新しい波の打ち寄せるように飛躍の年となるよう望むものです。

二科会北陸支部も総勢五十数人（絵画・彫刻・商美）となり、本展においてここ数年来連続して特選

や記念賞などの受賞者を出し、本部でも驚異的存在とされ、二科展に北陸の新しい波が打ちよせて来たととも言われています。これは私自身の日ごろの思いでもあるのですが、期待という勢いに甘えることなくおごらず誠実に、ていねいに自分の力を出し尽くす努力を惜しんでいないことだと思っています。芸術の極致は高邁（こうまい）な精神と深遠な技術、内なる魂の記録を力強く表現するということです。

今年の北陸二科は①己自身にさらに厳しく②われわれと共鳴してこの地で活動をともにする仲間への呼びかけ③活動の基盤である地域文化の発展と向上に貢献する一を決意しています。」¹⁹

二科はその歴史からもある種の在野精神をもって権威に抵抗感を抱く、自由な気風を保ってきた。その中で北陸支部は、第4回展の後3年間のブランクはあったものの、昭和39年以来毎年欠かさず今日まで展覧会を催してきて、その存在は大きくなった。増田先生は会員数が少なかった昭和30～40年代には、壁面を埋めるために一人で20点近くの作品を出品したこともあった。昭和57年以来、何度も北陸にも二科展の巡回を実現するようになった。北陸二科のメンバーが受けた諸賞の内、パリ賞受賞者としては昭和60年の本人以来、金沢ではまた2名が加わった。

北陸中日美術展の審査員を引き受け、同展に展示



「画室の午後」、昭和五十五年

したこともあるのは、この様に築いた自信と、自由な体質によるものでもあろう。前節で増田先生の作品に日本的情景が増えてきたことを記したが、二科展への出品作も昭和62年から少女を配した優しい心情の構成で、西洋のモチーフがあまり登場しなくなる。それらはF150号の大作で、考え精魂を込めて制作している。またそれらは花を前景に飾った増田調の作風ではなく、平成元年の『花と少女』がややそれに類するが感覚は異なっており、二科へはいつも芸術上の新たな探求をもって挑んでいたことが分かる。

5 洋と和・生と歴史

昭和42年にサロン・ドートンヌに出品して以来、同展とは疎縁になっていた。やがてサロン・ドートンヌと二科会は交流を再開し、昭和61年末には前記の『朝陽花』を出品した。昭和62年にはサロン・ドートンヌの会員となり、その後日本情緒ある絵画を秋毎に送り、その展覧会を出来るだけ見に行った。

増田先生は、さすがパリに到着すると生き生きした様子であった。パリでは若い頃はモンマルトルに住んでいたこともあるらしいが、モンパルナス界隈をホームグラウンドのようにするようになり、定宿としてHôtel des Bainsがあり、来る度にそこの馴染みの女将にお土産か花を渡した。モンパルナスでカフェに座って街を眺めている時は無口で、美大のことなどは口の端に載せなかったが、柏健先生などと一緒の時にはよく話しかけていた。オニオンスープや魚介類のスープが好物であった。

パリ以外では、当然シャルトルに日帰りでスケッチに出向くことが多く、またシャンティー城やオヴェール=シュル=オワーズも好んだ。グラナダやセヴィリヤの町やフラメンコも気に入っていたし、ブリュージュにも行った。ヨーロッパでは、モチーフとなる骨董、人形、陶器類を手頃な値段で買うのを楽しんでいたが、時には籠を見て指で編み目のパターンを空になぞり記憶していることもあった。

毎回のようにはパリで買う携帯用の縦長な絵具箱と

三脚折り畳み椅子は、アトリエに貯まった。画集もよく買ったので、帰りの荷物は多くなった。この全く典型的な絵描き風の態度と気持ちは、おしゃれな増田先生に相応しく、心の安らぎであり、そのモダニズムを支えるものであった。

大好きなパリでは、早朝から帽子をかぶって風景写生に出かけた。当初はパステルが多かったが、最近は油絵で直接描いて来ていた。また風景描写の中に、線を入れてみることも見受けられた。デッサンはこの年になると面倒だと、言ったこともあった。近年は、二科がブルガリアで展覧会を開催したのに出品し同行したり、ヴェネツィアも描いた。東欧については、二科の団扇にその絵が残っている。東欧の若い作家についても気にして、そのデッサンなどを美大の資料にしたら良いと言っていた。また、平成7年にはウズベキスタンへも旅行し、その後現地の作家を招聘してその作品の展示を金沢で企画し、美大の資料としても購入した。

ルーブル美術館では、19世紀の部屋、アングルや『メデューサ号の筏』などを熱心に研究し、大画面の構成・構図に関心を見せていた。フランドル美術にはあまり関心を寄せなかったが、『バベルの塔』だけは例外であった。こうした海外での充電は、先生の画業に必須不可欠なものであったと言える。

日本では、その精力的であると共に独自性を深める絵画制作と平行して、スポーツマンシップと趣味があった。中学生の時に野球部に属していて、中学教員の時は野球部の指導をし県大会出場に導いた。またその頃、ハンドボールもしていた。美大教員になって、野球は3塁手で4番打者であった。このポジションを、百々先生に譲ってからは、監督であった。また30~40代には、バドミントンを良くしていたようである。ゴルフもしたが、スポーツ以外の雰囲気が出てくると避ける様になった。考えながらも明快さを求めて、てきぱきと画面を処理して行く決断は、このスポーツ性と無関係では無いであろう。

趣味として、貸家住まいの30歳代にはパチンコもしてたが、それも大衆性につながるものである。しかし自宅を持っただけからは徐々に増築し、住環境を好

みに合わせて整えて行った。庭園造作は最大の趣味となり、庭師を入れることもあったが、自分のセンスで庭木や庭石を集めたり梯子に登って落ちたこともある。椿に関心があり、色々な椿を買っていた。この自宅の庭は、金沢の庭を紹介した本に掲載された。増田先生の前述の日本の心への関心を見ると、この趣味的な態度もその芸術性につながる所がある。絵のモチーフとするものを金沢や日本で求めているが、やがて色が明快で構成しやすい、花車、獅子頭、手鞠、けん玉など日本的な物となる。それは、自分の美術に適った色彩的興味からであろう。

金沢市から依頼された金沢市観光会館の第一緞帳の原画『陽光』は、昭和63年2月に引き渡された。それは増田スタイルで自然の中の花がテーマとされているが、思い切った遠近と盛り花による装飾呈示となっている。このある種の大胆な絵画は、和洋融合した感のものとなっている。作者はあっさりと、「四季を意識。通年、お客さんの心をなごませる作品づくりを心掛けた」と述べている。²⁰

昭和61年頃からは、情感と優しさが作品にも題名にも一層こもっている。それは一種のロマンチズムとも言うものであろうか。中には依頼が理由であるものがあるとしても、金沢・石川県の景色や日本の風物を取り上げるようになり、ロマンのある情景に仕上げて行く。「ふるさと切手」の原画『七尾湾と能登島大橋』（平成5年）も清々しく光景を美しく捉えている。芸術の幅を広げた増田先生は、様々な依頼をこなしていく。ともあれ日本情緒の表現について、昭和63年の『東山情話』の新聞での全面カラー掲載に付した言葉を転載しておくこととする。

「風景と静物とを組み合わせ、もう二十年になる。単なる風景を描く時代は済んだ、と考えていた私は、ヨーロッパの風景に私が探している新しい絵のヒントが隠されていることを知った。フランスなどへ行くと、家々の窓辺には必ずといってよいほど植木鉢やプランターがあり、美しい花が咲いている。その家の中から窓外の景色を眺めると、手前に置いた花の向こうに風景が広がるのである。風景画に自分の感情をより強く表現したかった私は、このダブ

ル・イメージを追究した。

ここに描いたのは金沢の旧東廓（くるわ）である。エジプトやギリシャの文化に心酔し、ヨーロッパ美術に今なお気持ちのたかぶりを覚える私だが、ここを通りかかった時に詩情を感じた。旧廓は女の街である。律義で繊細な白格子の向こうに、時間に包まれるようにして女の喜び、そして悲しみがある。現代生活では次第に失われてゆく人間（ひと）の詩情、大人のメルヘンをみたのは私のロマンチズムのせいだけではないだろう。手前の静物はその女たちの加賀友禅、手まり、折りづる、カキツバタである。日本の風景に日本の小物を組み合わせたのはこの作品が最初になった。

まだ少し風に冷たさが残る美しい日の午後であった。」²¹

増田先生の使用する画材は、色彩に拘っていたのでパリで購入したルフランや高価な絵具もあったし、画材屋さんの在庫整理という言い方でクサカベなども多量にまとめて仕入れてあげたこともあったが、アクリルなどは用いなかった。筆は若い時分は平筆が多かったが、後年は軟筆で貂など、また近年は高価な細いものを使った。カンバスは、特に自製しなく、既成のフナオカのいいもので細かい目のものを使用するようになった。FやS型が多くPは見かけないが、8角など変形も作らせるようになった。額にも凝って、注文制作もよくした。これらにはとりわけ特殊な点は見られず、油絵家らしい画材と言える。伝統的な用材で如何に個性的表現と新しい価値の創造に向かうかと、努力したところに先生の創意工夫があった。

一家は、現在二科会員の夫人とやはり優秀な才能の画家となった子息であるが、家にアトリエを三つ造りお互い不干渉で制作した。御子息とも相互不干渉であったようであるが、その画家としての成長には並々ならぬ気を使い、心底で喜んでいた。このような芸術一家は、まさにそれぞれの自由を尊重する二科と増田先生の気持ちに沿ったものであったろう。でも他人には測れぬ家庭的また芸術的な心労が、いつもあったと思われる。先生は内臓に石が出来や

すい体質であった、第1回目のパリ滞在中に発病しその後しばしば治療をしていて、身体に気を使いながら積極的な気力で仕事をしていたが、平成3年には石や胃潰瘍のため長期間入院した。

合評会では、よくエコール・ド・パリの画家などの名が出たが、彼らの芸術からの勉強だけでなく、その生き様、作家の姿勢に興味があったらしい。平成4年にシャガールの作品を評した中に、次の解説がある。

「重力から解き放たれたように、無邪気に両手を広げたポーズで描かれ、生命の讃歌（さんか）を歌っている。だが彼らも、彼自身と同じように悲劇的な運命を負った人間の象徴である。

個人個人の愛だけがすべての出発点という彼の信仰が甘く悲しく、われわれに呼びかけている。」²²

増田先生の美術には、やはり喜びと哀感、思索と感性の人生観が透けて来るところがある。平成4年から8年までの二科展出品作は、全て和服の女性を描き、それも少女から成人へと段々年齢が上がって来ている。また日本の歴史的なモチーフが現れて来ている。この頃の研究について、次のような報告書を提出している。

「研究課題 絵画における

空間 色彩 構図の研究

ここ近年 美しい街角や 愛らしい子供たちなど身近な物をモチーフとして制作を続けている。本年度は それらへの愛着や、構図に対する関心が制作の基盤であった。

物と物との関係から生ずる空間には 多様性があり、色と形 線とのひびき合いで、さらに大きな空間が生まれると信じ 制作を続けている。」²³

「研究課題 絵画における空間・色彩・構図の研究

対象とするモチーフや風景の形と形との

関係に空間を求め、

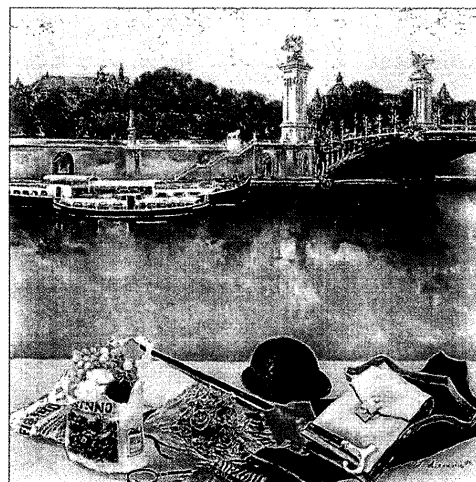
形と色を意識した象徴性を強めた

構図の研究を 制作を通して追求した。」²⁴

この文の段落と字間は何らかの意味があるのかも知れないと思い、そのまま転記しようとしてあるが、この欄の形式上原本とやや異なる。増田先生の文は、

既に幾つも見たように神経を使って書かれてあり、よく思うところを伝える名文である。そして多くの文を残したが、画家としては希に見る文章力で大学の紀要に学術論文として、油彩技法の研究報告を2度も上梓した。

平成8年の二科春期展に出品した『夢・セーヌ・旅人』は、前年のスケッチをもとに描いたものであるが、前景のモチーフと風景に形と象徴性を平明に表し、自己の心情を率直に示していて、これが増田先生だとも言えそうである。平成8年の暮れから翌正月に掛けて、フランスとトルコに赴いた。その成果は、絶筆となる第82回二科展出品の『イスタンブール回想』である。そこには、これまでの日本情緒から一転するが、歴史に思いをはせるまた新たな構成が出現していた。絵画の伝統を重んじ、モダニズムを自分なりに展開させた増田先生のパレットは、美しい色調に絵具が配され、再び主人の手に載せられ創作を静かに待っているかのようにアトリエに置かれている。



「夢・セーヌ・旅人」、平成八年

6 美術教育

金沢美大での先生の教育は、多くの学生の心に残るものであり、また大学の発展に尽くされた貢献にはまことに多大なものがある。

学生運動が激しい頃に着任したが、学生の気持ち

をよく掴んでよく掌握した。それには自分が学生時代に自治会で役員をしていたことも生かされていただろう。また、学生とスポーツしたり遊んでいれば悪い方に行かない、とも言っていた。それは教官としてただ上から対するのではなく、姿勢を下げて接する態度である。学内だけでなく、学生同士や学生と先生に「喫茶店会話」が必要だとよく言い、ケーキを食べて私につけて来いと推奨していた。入学ガイダンスで、「野球の好きな増田です」と自己紹介し、親近感を醸成していた。旧校舎時代には自宅が学生のたまり場であって、1年間1日も休まずに訪れた学生もあったり、自宅の新築の際にはよく学生が悪戯しに来たとのことである。学生に健康や精神上の問題あれば、すぐ親と密に連絡を取った。このようなコミュニケーションを大切にする配慮は、生活全体と美術の道が結びついているので、熱意ある美術教育上の指導である。

7年余の中学教師生活の経験は、美大でもその教育整備に生かされた。学生委員や教務委員の業務を担当して、美大の油絵のカリキュラムをその学年別単位配分、科目のシラバスの内容、入試案内書や学校案内における専攻の教育理念等の説明文を策定して行った。今日の油画専攻の名称も東京芸大に倣って増田先生の意向によるものであり、同専攻は先生が先任者達の路線を発展して築いたシステムを基盤としている。

先生は自分の福井時代の教え子が芸大に入れたことを話していたが、東京芸大に比較して金沢美大が東京並に形を整えることを、大学人として一貫して努力した。絵画組成、版画、フレスコ壁画を油絵の脇に定着させたのも、自分がメンバーであったプロジェクト委員会の昭和50年の報告にうたったことの実現である。芸大を意識し入試を2日間に充実したり、石膏像を揃えて行った。

小立野の現校舎に移って増田先生の尽力で増やされた石膏像には、ヘルメス、デルフォイの御者、ポセイドン、アポロ、ギリシャ婦人像、アテネのニケー像、着色のアクロポリスのレリーフ、ミケランジェロの奴隷、ジョルジュ像などが挙げられる。中で

も、研究棟と美大ホールの新築に際してモニュメンタルなものとして騎馬像の購入に努力したが不可能なので、モーゼと、日本には一つしかないラオコンをセットで仕入れた。これらのため東京の業者にアンテナを張ると共に、パリに行くとオデオンの石膏屋やルーブルの貯蔵所などで交渉していて、ロダンも欲しがっていたが、『考える人』は販売でなく貸与される方式となるので断念するのを残念がっていた。このような石膏像についてはデッサンなくとも、毎日側を通ればそれで勉強になると語っていた。東京芸大では像が石膏室に集結されているが、金沢ではパリの美術学校に近い形でエントランスホールなどにも展示され、ヨーロッパ的環境の形成を志向していたと言える。彫像のネームプレート作成にも熱心で、市民が通っても分かるようにと言っていた。美的な環境の形成には細かい神経を使い、石膏像の台座の形式にも拘り、上板がつばを持つようにしたり、学内に展示される絵の高さに気を付け、また傾きがあると自分で直していた。

他の油絵の教授達が鷹揚な気質でもあったので、増田先生は実務的な面や大小のことを引き受けて努力せざるを得なかった。油絵分野の施設とスタッフの拡大も実現して行ったが、こうした充実の意欲は他の芸術大学との競合意識から来ている面もある。平成元年の〈美大だより〉に載せられた談話には、次のような語句が出ている。

「全国の各大学、国公立の四芸大、また私立の美術系の大学が、それぞれ組織改革をすすめて明日の美術大学を目指す機運の中で、我々も21世紀を念頭に個性ある地方大学という性格づけを無視して通ったら余り魅力のない大学になってしまうのではないか」、「旧態依然とした教育であってはいけない。明日の美術大学を目指していかなければ…」、「技術的な修練だけでなく欠けてはならないのは、何をどう訴えるか、という“考える”絵画、そしてその教育」。

25

入試のモチーフについては、先生は以前は胸像までだったものを、半身像まで描ける体制に拡充していった。また光の大切さを気にして入試の開始と終

了時刻に拘り、1日で終えずに自然光の良い時間帯の2日間とした。第1次の採点では、見落としがないかととても慎重であった。2次の出題では、描き易さ、色彩に配慮するものを選び、シンプルだがポイントがあることが、コスチュームなりポーズに現れていた。

入学ガイダンスでは、絵画は結構大変な道だと親にも説いていた。そして入学生にはソフトな言葉で厳しい道を示したり、「今日、ロールキャンバス1本買って貰って、1年で使い切りなさい」と、具体的な指導を与えたりした。

学生の写生研修旅行には熱心でその必要性を説き、宿でも指導を継続していた。そして、「朝食前にイーゼルを立ててこい!」との激も飛ばした。次の引用は、美術学校で一番大事なことは?、との問いへの昭和53年の先生の返答である。

「これは何も絵に限らないわけだが、若い人には可能性があります。とにかく、自由にやらせてもらう中で、隠れた才能をうまく引き出してあげることが難しい。だから、いつも学生と一緒にいて、話し合うことを大切に。徹夜の議論なんかもよくやるし、教えるだけでなく、逆に教えられることもあって、教員もなかなか楽しいですよ。」²⁶

学生の指導にはなだめたりすかしたり、自信を持って頑張れと言っていた増田先生の美術教育の信条の一つは、人体の把握と表現である。それは、次の文章に表明されている。

「人間の身体を最もすばらしい創造物であると信じ、美として賛美したのは、古代ギリシャ時代であった。

その後、ルネッサンスは長い宗教芸術の時代に、聖伝説として描かれつづけてきた人物画に、はじめて個人の意識にめざめ人間味と現実感を与えました。また、絵画の基礎を人体におくという伝統的な指導方法を作りだしたのもこの時代だったようです。

十七世紀以後は、リユーベンス、レンブラント等のように、人物の完全な形を追い求めつづけながらも、感情や性格までも描こうと努力を重ねたので

す。

現代にいたっては、ピカソはく見えるものを描くのではなく、知っているものまでも描くのだ」と直感的に自由な創意で形を描き、人物画の概念をかえてしまいました。

現代絵画は、時代とともに機械文明の浸透も受けて、現実的で考えながら描く知的な表現方向へと進み、さらに前衛的な画家たちは、伝統からはみだした新しい方向に絵画を発展させたのです。その表現方法も絵画の中に絵画以外の材料である新聞紙や布切れなどさまざまな物質が用いられ、油絵という伝統に挑戦をしているのです。

今日、現代芸術における人物画の重要性を定義づけることは大へんむづかしいことだが、私は、人物を描くことは 絵を描く者にとって永遠の主題であり、画家の教育および経験として必須のものであると考えます。

ヨーロッパのアカデミーでもそうであったようにわが国においても人物を描くことは、教科課程のうちで最も重要な部門と考えられていましたが、新しい価値を求める現代において、古いアカデミーの感覚で人体を描くことは次第に軽視されつつあります。しかし、私は絵画表現の第一歩は人体からであると確信をしています。」²⁷

合評会では、描写力・構合力・色彩を重視する観点で指導し、「色のおしゃべり」「色の対話が必要」との語が出された。またよく使う言葉として、「神経をもっと使え」と、細やかな先生らしい指摘もあった。「絵描きの感性では、一つ聞いたら三、四とその先を嗅ぎ取るべきだ」と、美術が感性的見通しの錬磨に懸かっていることも教えた。錬磨には、「数を描け。1点では言いたいことが伝わらないだろうから、複数描け。ここに並ばないほど持てこい」と奮起させたり、合評を一過性の儀式にせず、1週後に再提出させたりした。そして過剰な指導ではなく、学生を自主的努力と解決に仕向けた。そのため時には禅問答みたいになることもあったが、学生は嗅ぎ取らなければならなかった。

素朴な風景画を提出する学生には、「これで良い、

こういう人がいても良い」として、技術的な学校教育が全てではないとの考えであった。先生の批評は高所からであっても指図的なものではなく、具体的な例をあげた指導であった。たとえば隣の医学部の学生が夜遅くまで勉強しているとか、野球、スポーツの選手の精励が引き合いとされた。そしてモジリアニ、ピカソ、マチス、ボナールの名が合評会でよく出された。それは、彼らの生き様、作家の姿勢への関心からであった。

先生は、抽象画でも良いものに一番理解を示された。でも抽象を擁護しても、少数な制作では不満気味であった。現代美術については、次の解説がよく先生の見方を表している。

「現代の若者たちや私が毎日大学で接している学生にとってアンディ・ウォーホルは、彼らの生まれる前のヒーローなのだ。一九六〇年代のポップ・アートは、アメリカで唸（うな）りを上げ私の青春絵画のパッションと決して無縁ではなかった。当時は、型破りで無情に思えた彼のアートにも今観（み）れば詩的な優しさが秘められている。

マリリン・モンローを笑わせて、泣かせ、そして怒らせるのに、彼は色面を変えることだけの手軽な手法で簡単にやらかし、日常的なもの（スूप缶や切手）などをただ反復させて並べるだけで、ユニークなアートにしてしまったのだ。看板やコカ・コーラの瓶に興味と興奮の目を向け、それらをなんら構図的な工夫もなくクールに画一化し、人工的な輝きに変えてしまったのだ。彼は絵画の枠を飛び越えた社会のあらゆる事象を取り込んで、新しい次元のアートを作り上げた。

一九二八年、フィラデルフィア生まれの移民の子は、憧（あこが）れの映画スターの肖像と、もっともポピュラーな食べ物などを、描くというよりほんの少し手を下すことだけで写真製版やシルクスクリーンなどでカンバスに転写させ、従来の美意識を一変させてしまった。

商業的産業の産物を利用し芸術と生活を同一化した彼のアートは、今は街に根付いているが、そのなかで育った若者たちは親切すぎる情報の氾濫（はん

らん）のなかで考え、非個性化されてしまい、なんと優しいことか。その優しい彼らとそれに不安をいだくわれわれとが、ともにアンディ・ウォーホルのアートの世界を観ることにより今日的な深い意味があるのではないだろうか。」²⁸

増田先生は、卒業制作の買い上げ作品は教育資料になるものだから、タイプの異なる物を選んで必ずしも成績が1番と2番の作品に限らなかった。卒業制作で良い物は良いとして、規格外の大きさでも、1点が提出の決まりであっても2点を認めたり、2点とも展示させたこともあった。「凸凹が面白い、杓子定規では貧弱になる」とも言い、依怙（いこ）鼻（び）もある意味では構わないとした。それは自由を重んじ、新しい価値の創造者を抜擢・待遇する二科の体質みたいなところもあり、それを美大の教育の場でやろうとしていたのであろうか。

「美大出たら、一応のことができるレベルにする」と、全体的水準の向上の教育の傍ら、抜擢的プロモーションの両面の配慮をしていたように思われる。美大の教育と価値については、「何十年か経って、何人作家を出したかで評価がでる」とよく語った。大学院生には、「自分が、金沢、石川、世界のどれを相手にするかを見定めよ」と言っていた。卒業生に対しても、会うと「仕事しているか？」と指導し話をした後、彼らは元気を出して帰った。

専攻と学校の運営は美術教育と密接して重要であるため、会議などの学校業務のため、研究日であってもほとんど毎日登校していた。若手の教員が運営上の判断の基準を求めると、「基準は学生のためによかれということだ」と答えた。しかし頭を下げて廻ったり根回しや談合を好まない清廉さのため、不利を被る方向が生じて、「おこらんこっちゃ」を油絵の教官室で口癖としていた。その達観は、自信と割り切りに基づき、「まー、黙って見てまっし」もよく聞かれた言葉であった。同僚には、ミスがないことが大切だとアドバイスしていた。

平成8年の＜美大だより＞からは、増田語録として次の様なものを取りあげておくこととする。

「どこまで基礎を考えるか、死ぬまで基礎という

考え方、セザンヌの場合は朝1時間は石膏デッサンに向かったというような考え方があるでしょう。純美の連中はそういった1つの堅さを持っているんですよ」、「美術の方は、合格の作品に良さがあるんじゃない。社会からはぐれたようなものにも良さがあるんじゃないかって評価もします。はぐれていてもいいのはいいのだと、社会に貢献したものがいいわけじゃないんです」、「ゴッホははぐれてる、ユトリロやゴーギャンもはぐれてる。隅っこでこつこつとやっていた。皆平均化されたものつくったらいけないって要素もあるんですよ」、「残されていく時は、大事さというのが残っていく。いい加減さは、うけてても消えるかもかもしれません。それは、後世の人が考えればいいことで、我々は、1つの教育を情熱をもってやらなきゃあかんことは事実です」、「アカデミックという言葉が非常に難しいんで…セザンヌはその時代に、はみ出し的な要素の、明日を夢見てアカデミズムをやっていたし、カンディンスキーもそうだった。けども、今見たら決して時代からはぐれていない、現代に通ずる要素がある。だから時代の流れの中に通じていく1つのアカデミズムっていうのを考えられなかったら、その人はやっぱり絵画音痴でしょうね。」²⁹

時には気楽に揶揄も交える増田先生であるが責任感が強く、昭和50年代の後半から10年間近くをかけて着々と学内の組織改革のプランをその委員会で策定し実施して、美大の今日的発展の基盤を形成した。その人望によって、平成2年から運営評議員に通算6年間に亘って選任され、美大の運営に大きく貢献した。近年は博士課程設置委員長として先頭に立ち並ならぬ精力を傾注し、大学院専任教授5名の増員などを市長に説得して、わが国で東京芸術大学に次いで2番目の美術の領域を総合的に包括する博士後期課程を平成9年度から発足させた。

註

- 1 昭和31年9月21日の中日新聞「福井」欄では、第9回県総合美術展の写真一枚が掲載され、それは増田孝の抽象作品『無限への輪舞』で、中部日本新聞社福井支局賞を得ている。
- 2 昭和33年9月8日の福井新聞の二科展評で、活躍する本県作家として、『青のリズム』が写真入りで紹介された。昭和34年9月15日の福井新聞に抽象作品『動く』が写真入りで掲載され、線だけの構成で、以前と比べあっさり、すっきりとしたしているが、画面いっぱいに意欲的である。また昭和35年の二科展出品『作品A』も新聞に掲載された。抽象作品で直線と曲線の組み合わせを、黄色を主体とした多彩な色で独特の美を表現した。
- 3 福井県文協新人賞を受賞した時のインタビューに、「また学生時代に彫刻にひかれて、レリーフや首などを作ったことがあるが、これもいまの作品に大きく影響している」と記されている。福井新聞 昭和42年3月26日 昭和36年にモダンな3人体の『対談』を3年生に作らせたことが、福井の新聞に写真入りで出ている。また彫刻を、展覧会にも出品していたらしい。
- 4 <越前富士・日野山>、アートグラフ、昭和54年10月号、62頁
- 5 昭和42年の上記の福井の新聞記事などから。
- 6 <人間的優しさ 時代を見つめる目> (東郷青児美術展に際して)、昭和62年9月3日、北国新聞
- 7 <街の魅力>、コラム「舞台」に、昭和54年2月24日、北国新聞夕刊
- 8 昭和43年11月21日、毎日新聞 福井版
- 9 昭和44年10月20日、中日新聞 福井版
- 10 <“永遠青年”目指す>、美術サロン欄、昭和53年10月30日、読売新聞
- 11 <中部の洋画家群像>シリーズの一つ⑧、昭和54年1月19日、中日新聞。

また翌年の次の文は、探求心を自他に呼びかけている。「現代絵画のれい明期ともいわれている大正初期に抵抗の精神の高揚で旗あげをした二科展は、幾変遷はあったものの六十六年の歴史を持っています。北陸の地に支部を結成して二十一年。その時の仲間も今はなく私ひとりだけが当時を語るのみです。支部同人の年齢層は大へん若く、新分野の追求と発見に積極的です。一面粗削りのようですが、未知の可能性を含み楽しみな会といえます。

(中略)

毎年、北陸二科展では本展を初秋に控え、ひとりひとりの一年間の模索の跡を一堂に集めて、会期までの残された期間に何を成すべきかと己に問う場としております。芸術において習うということは、他人の力での解決を求めることでもあり、それが許されるのは技術面だけだと思います。やはり芸術の本質は己の内なる声に耳をすませ己自身が行う(表現)ことにあると考えるものです。北陸二科展開催の五日間は自問自答をくりかえし、創造の深淵(えん)に対決する体勢をつかみたいものです。

しかし創（つく）る者は見る側を忘れてはならないと思います。われわれは多くの人たちに見ていただきたいと願い、それを励みにして、あすから今世で最も見事な作品を夢みつつ取りつかれ苦しみながら創る活動を続けて行こうとするものです。」＜一年間の模索の跡を一堂に＞ 北陸二科展によせて、昭和55年7月12日、北国新聞夕刊

- 12＜坂本繁二郎の芸術＞「明治が生んだ洋画の巨匠展」に寄せて、昭和52年9月22日、北国新聞夕刊
- 13＜東洋的な心＞（一面カラー）、現代美術展開幕迫る、昭和57年4月14日、北国新聞
- 14 昭和59年12月31日の北国新聞には、次の批評が載っている。「増田氏のかく具象画は、どちらかといえば寒色、つまり青系統が多い。雰囲気が硬いといわれる理由がここにあるようだが、線の切れ味が鋭く、細かい部分の描写に神経が行き届いていて、色の与える硬さを超えて締まりのある構成効果をもたらしている。いわば、北方風の空気を伝える絵といえようか。」
- 15＜石川門礼賛＞、ふるさと加越能を描くシリーズの一つ、昭和58年5月2日、北国新聞
- 16＜リズムミカルな色彩の構成＞、昭和60年12月13日、北国新聞
- 17＜増田孝氏を悼む＞、鳥取政昭、「二科」第34号、平成10年4月30日発行
- 18＜手さぐりしながら己へ挑戦＞、昭和56年5月30日、北国新聞夕刊
- 19＜年頭所感＞、昭和57年1月9日、北国新聞夕刊。
翌年の年頭にも、次のメッセージを寄せている。「私たちは、新しい価値を追求し自由な制作活動を続けながらこの地に広まり根ざして来た。若手の活躍がめざましい二科支部の評価は高く、期待もされている。しかし、いかに時代性を受けとめ、いかに新しい様式を追い、いかに理論がすばらしくとも、それだけでは作家は育たない。一人ひとりが人間として純粋であること、自分を深く掘り下げることを怠ってはならない。若い年齢層の多い二科支部（絵画、彫刻、商美）同人に期待し、己をいつわらぬ仕事の年にしたい。」＜年のはじめに＞（中）、昭和58年1月22日、北国新聞夕刊
- 20 昭和63年2月11日、北陸中日新聞
- 21＜東山情話＞ふるさとの作家が描く12景シリーズの一つ、昭和63年5月14日、北国新聞
- 22「シャガール名作版画展」の解説文より、平成4年5月12日、北陸中日新聞
- 23 美大平成5年度「教員の研究委託結果報告書」より、平成6年3月31日提出
- 24 美大平成7年度「教員の研究委託結果報告書」より、平成8年3月31日提出
平成8年度教員の研究委託結果報告書（平成9年3月31日）も同文
- 25＜明日の美術大学を目指して＞、「美大だより」、No.4、1989年11月9日発行
- 26＜“永遠青年”目指す＞、美術サロン欄、昭和53年10月

30日、読売新聞

- 27＜絵画表現の第一歩＞、現代の人物画展によせて、昭和63年3月6日、北陸中日新聞
- 28＜絵画の粋飛び越え＞、「すべての社会現象取り込むポップ・アートのヒーロー アンディ・ウォーホル展（上）」、平成元年6月5日、北陸中日新聞夕刊
- 29＜座談会 21世紀の美大を考える＞、「美大だより」、No.10、1996年11月20日発行

年譜・業績

【略歴】

- 昭和11年9月1日 福井県武生市余田町に生まれる
- 昭和30年3月10日 武生高校卒業
- 昭和31年4月16日 金沢美術工芸大学美術学科入学
- 昭和35年3月8日 金沢美術工芸大学美術学科絵画専攻卒業
- 昭和35年 金沢美大高光一也教授助手
- 昭和36年4月1日 福井市明道中学校教諭
- 昭和44年10月10日 金沢美術工芸大学美術工芸学部講師、47年4月 助教授、60年4月 教授
- 平成9年11月5日 逝去。 正四位、勲三等瑞寶章

金沢美大での主な役職

- 平成2年4月 運営評議員～8年3月（3期）
- 平成6年秋より博士課程設置調査準備委員長、
- 平成7年12月 博士課程設置委員長～9年3月

【画歴・受賞】

- 昭和29年 第39回二科展初入選、以後連続入選
- 昭和35年 卒業制作大学買い上げ
- 昭和38年3月 プールヴ賞受賞（美術文化協会展）
- 昭和40年 第50回二科展 50周年記念協賛賞
- 昭和41年 第51回二科展 二科会会友推挙、
- 昭和42年3月 福井県文化協議会 美術部門新人賞
- 昭和42年6月 サロン・ドートンヌに入選
- 昭和45年5月 石川第26回現代美術展 市長賞
- 昭和46年5月 石川第27回現代美術展 最高賞
- 昭和47年5月 石川現代美術展無鑑査推挙
- 昭和48年5月 石川現代美術展無鑑査出品（その後、無鑑査、審査員出品）

昭和51年5月 石川第32回現代美術展 特別賞
 昭和51年9月 第61回二科展 二科会会員推挙、
 二科会北陸支部支部長
 昭和52年5月 石川県美術文化協会監事
 昭和54年9月 第64回二科展 会員努力賞受賞
 昭和59年4月 石川県美術文化協会理事
 昭和60年1月 石川県作家選抜展
 昭和60年9月 第70回二科展 パリ賞受賞
 昭和61年2月 石川県作家選抜展
 昭和61年5月 二科会評議員推挙
 昭和61年10月 サロン・ドートンヌ招待出品
 昭和62年5月 サロン・ドートンヌ会員
 昭和63年11月 北陸中日美術展 審査員出品

【二科関係】

本展：第39回（昭和29年）から第82回（平成9年）
 まで44年間連続展示
 春期展：昭和53年から平成9年まで毎年展示
 北陸二科展：第1回（昭和32年）から第38回（平成9
 年）まで毎回展示

【個展】

第1回昭和37年5月、福井市、勝木書店で第一個展、
 5～6月、品川画廊で第二個展。
 第2回昭和38年。
 第3回昭和41年11月、福井市県民会館。
 第4回昭和43年11月、福井市県民会館。
 第5回昭和47年11月、金沢市観光会館。
 第6回昭和50年12月、福井市県民会館。
 第7回昭和53年11月、金沢市、画廊 峰。
 第8回昭和56年12月、金沢市、シティホテル。
 第9回昭和57年12月、福井市、県民会館。
 第10回昭和59年12月、福井市、西武だるまやデパート。
 第11回昭和60年12月、金沢市、大和デパート。
 第12回昭和61年12月、福井市、品川書店画廊。
 第13回昭和62年12月、金沢市、大和デパート。
 第14回昭和63年12月、金沢市、国際ホテル。
 第15回平成5年6月、金沢市、蛇の目ギャラリー。
 第16回平成6年8月、金沢市、ギャラリーKAZU21。

第17回平成7年1月、金沢市、ギャラリーKAZU21。

【福井県美術展関係】

昭和29年、新聞社賞。30年、新聞社賞。31年、市長
 賞。32年、市長賞。33年、知事賞。34年、文協賞。
 35年、招待推挙。36～38年、招待出品。39～44年、
 審査員出品。

【石川県現代美術展】

受賞等は上記（画歴欄）。

【サロン・ドートンヌ】

上記（画歴欄）、会員になって平成年間に出品。

第1回滞仏中に出品したところ

昭和43年2月、サロン・ソシエテ・ナショナル・
 デ・ボザール（パリ、近代美術館）。

昭和43年3月、サロン・デ・ザンデパンダン（パ
 リ、グランパレ）。

昭和43年4月、ル・サロン（パリ、グランパレ）。

【その他の展覧会等】

季陽展 東陽画廊（東京）

昭和49年5月、51年5月、52年5月、54年5月。

浅の川画廊

昭和62年4月。62年8月。63年1月。63年4月。

昭和62年3月、燦の会、KANAZAWA アートセン
 ター。

平成8年1月、四人展、金沢市。

平成9年3月、ふるさとの美加賀・能登百景展、金沢
 大和デパート。

【依頼・設置】

昭和56年3月、金沢市市民ホール「花と市庁舎」

昭和56年5月、加賀市少年婦人会館ロビーのモザイ
 ク壁画 「春陽」

昭和63年2月、金沢市観光会館緞帳原画 「陽光」

昭和63年11月、金沢市市政100周年記念画 「祭り

のころ」

平成5年4月2日発行、郵政省 日本郵便ふるさと切手原画「七尾湾と能登島大橋」

平成元年5月、老人保健施設アルテンハイム（鹿児島県加世田市） 「春風」

平成4年3月、金沢社会保険健康センター 「微風」

平成5年2月、石川県厚生年金健康福祉センター「旅情」

平成6年10月、金沢市駅西保健所ロビー 「微風（ロワールの河畔）」

平成7年4月、金沢市泉野図書館ホール 「花籠のある風景」

平成7年6月、金沢市南斎場会議室 「水辺」
東斎場にもボタンの絵。

昭和58年5月、北国新聞 「石川門礼賛」

昭和59年11月、福井新聞 「蓮如の里・吉崎」

昭和63年5月、北国新聞 「東山情話」

平成6年1月、金沢市職員研修会講演「美術の流れ」

（いがらし・よしはる 美学）

（平成10年10月30日受理）

[彫刻等]

昭和60年3月、金沢市総合体育館前庭シンボルモニュメント 「躍動」、アルミ、共作

平成元年4月、金沢市制百周年記念「卓布」制作

平成元年9月、金沢市杜の里シンボルモニュメント「協調」、花崗岩（白御影）

平成4年5月、金沢市、第7回国民文化祭作品公募ポスター

[社会的活動]

昭和54年2月20日、国際児童年“伸ばそう若い芽”優良図書充実運動の図書選定委員委嘱、北国新聞社

平成元年、2年、福井県立美術館実技講座特別講師

平成3年2月、石川国体郵便切手デザイン審査、北陸郵政局

平成3年8月29日、第7回国民文化祭金沢市実行委員会委員委嘱、第7回国民文化祭アートギャラリー石川92（洋画）部門委員

平成4年5月20日、絵画「産業と文化」（宮本三郎・画）保存検討委員会委員（5年3月31日まで）、金沢市教育委員会